Short ショートコメント ★★★

ショータイム！

2022 年／フランス映画
配給：彩プロ／109 分

2023（令和 5）年 12 月 23 日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　２０２３－１５１

監督・脚本：ジャン＝ピエール・アメリス
出演：アルバン・イワノフ／サブリナ・ウアザニ／ベランジェール・クリエフ／ギイ・マルシャン／ミシェル・ベルニエ

みどころ

あなたはバーとキャバレーの違いを知ってる？それは『キャバレー』（72 年）や『シカゴ』（02 年）で観た、華やかなキャバレーの姿を見れば明らかだ。もっとも、バブル時代に広まったキャバクラや、かつて大阪で流行したアルサロ（アルバイトサロン）との違いもしっかりと！

あるフランスの農場が破産状態になったのは時代の流れのせいだが、その苦境を打開するため“3 代目”が考えたのが、“農場キャバレー”への転換！その発想のユニークさはお見事だが、そんなことが現実に可能なの・・・？

本作と同じ日に観た、ヴィム・ヴェンダース監督、役所広司主演の『PERFECT DAYS』（23 年）はドキュメンタリータッチの劇映画だったが、本作は、実話に基づく物語。宮沢賢治の「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」のフレーズは有名だが、本作ラストには「火事ニモマケズ」の風景が描かれるので、それにも注目！

これはフランスなればこその物語？いやいや、場合によれば日本でも・・・？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

◆本作のチラシの表には「農場にキャバレー！？一発逆転！フレンチ人情エンターテインメント！」の文字が躍り、裏には「破産寸前、閃いたのは“農場キャバレー”！この冬最高の笑顔と感動を届けます！！」の文字が躍っている。また、チラシの表の真ん中には、美しい肢体を見せつけながら舞台で踊る女性ダンサーの刺激的な姿が写っている。そのタイトルは『ショータイム！』だ。

“キャバレー”と聞けば、ライザ・ミネリが主演したミュージカル映画『キャバレー』（72 年）や、2 人の歌姫（ダンサー）と凄腕弁護士を主人公にしたミュージカル映画『シカゴ』（02 年）（『シネマ 2』59 頁）を思い出すが、農場にキャバレー！？そんなバカな！

◆誰でもそう思うはずだが、なんと本作のチラシには、大きく「実話」と書かれている。そのストーリーは、チラシによれば次の通りだ。

STORY フランス中南部の農場。農場主のダヴィッドは地方裁判所の判事の元へ出頭する。差し押さえを何とか2か月待ってもらったものの、成すすべもなく途方に暮れたその街からの帰り道、道端に明るく輝くネオンサインを見つける。「キャバレー」だった。虫が明るい所に引き寄せられるように店内に入っていくダヴィッド。そこで思いもかけないことを思いつく。農場の“納屋”をキャバレーにしてお客さんを呼べば一石二鳥ではないか!
それから前代未聞の“農場キャバレー”作りが始まった…。

◆冒頭、フランスの農村部に広々と広がる美しい風景が映し出されるとともに、そこで牛を飼い、農場を営んでいるダヴィッド（アルバン・イワノフ）が車を運転している姿が登場するが、3代目の農場主である彼は今、廃業の危機に瀕しているらしい。

続いてスクリーン上で描かれる、裁判所でダヴィッドが判事と面会する風景が、日本のどのような法的手続に相当するのか、弁護士の私にもわからないが、要するに、裁判所によって、農場廃止（破産）の期限が２ヶ月後と決められたらしい。そんな絶体絶命の状況下、ダヴィッドは、裁判所からの帰り道に立ち寄ったキャバレーで、踊り子のボニー・スターライト（サブリナ・ウアザニ）が演じている、えらくお色気タップリ（?）のショーを見ていると、心の中に“農場キャバレー”のアイデアが湧いてくることに！

◆本作が面白いのは、誰の目にもビジネスの才能など全くなく、ただ牛に優しいだけが取り柄の農夫と思われるダヴィッドが見せる不屈の精神（根性）。つまり、ダヴィッドは、一方では押しの一手を貫き、他方では牛に対する優しさと同じ優しさを周りのすべての人間に示すわけだが、それができれば、彼のように何でも成功できるということを本作は教えてくれるわけだ。

もっとも、私は本作に見るダヴィッドの成功は、たまたまのものだと思うから、誰もがダヴィッドのように思い切って別の人生に切り替えることを進めることはできない。しかし、そんな冷めた目で見ても、本作の意外性は興味深い。

◆農場キャバレーを経営するべくダヴィッドが目を付け、猪突猛進してボス兼プロデューサー兼プレイヤーへの就任を口説いたのはボニーだが、ボニーがそれをけんもほろろに断ったのは当然だ。しかし、しかし・・・。

他方、仮にボニーがボス等への就任を承諾しても、キャバレーのショーを構成するだけのメンバーを集めるのは至難の技だ。それは、宝塚歌劇団のことを考えれば容易にわかるし、かつて華やかなショーを誇っていた大阪でのいくつかのキャバレーを考えてもわかることだ。ところが、本作中盤ではボニーとダヴィッドの努力により、①耳が聞こえないマ

ジシャンの少女、ガブリエル（アリアーナ・リヴォワール）、②普段はホームセンターで働いているが、女装すると一転歌唱力抜群のディーヴァへ大変身するドミニク（フィリップ・ベナムー）、③姉妹でダンスを披露し、妹はジャグリングも習得しているロール&リーヌ（エルザ・ゴバード&リサ・ラフォン）、④催眠術師で何を考えているのか当てられる老人、ガボール（アラン・リムー）らが次々と集結し（オーディションに応募し）、ボニーの厳しい指導の下、わずか 3 週間で華やかなショーを完成させるまでに成長するので、その姿に注目！

◆映画『コーラスライン』（85 年）ではリハーサル風景が見物だったが、それと同じように（？）、フランスの片田舎で開設準備中の“農場キャバレー”の目玉となるショーの完成に向けてのリハーサル風景もドタバタ劇的展開ながら興味深い。とりわけ、本作導入部では一介の“お色気ダンサー（？）”にすぎないと思っていたボニーの、演出家としての能力の見せどころが興味深い。ある時は厳しく、ある時は優しく、そして結果的に“チームボニー”の完成を！それが目標だが、そんなことがたった 3 週間でホントにできるの・・・？

◆本作が興味深いもう 1 つの点は、破産状態にある農場を農場キャバレーに切り替えることについて、世代間の価値観のぶつかり合いが緊張感の中で描かれることだ。ダヴィッドは 3 代目の農場主だから、父親は健在。祖父も仕事からは離れているがまだ存命している。したがって、農場の経営権をダヴィッドが一手に握っていることに問題はないものの、第 1 にダヴィッドの選択を父親や祖父が認めるのか否か、第 2 にダヴィッドの妻や母親たちの女性陣がお色気タップリのキャバレーへの業種転換に賛意を示すのかどうかが問題だ。その点については、大反対の声が上がることが当然予想されるが、さて本作に見える実態は？

本作はその点を人情味豊かに、かつユーモラスに描いて見せてくれるので、それにも注目！

◆宮沢賢治は『雨ニモマケズ』の中で「雨ニモマケズ、風ニモマケズ・・・」と書いた。これは有名なフレーズで、ほとんどの小学生が知っているはずだが、本作ラストでは、そのうえに、ダヴィッドたちの「火事ニモマケズ」の風景が描かれるので、それに注目！

キャバレーとバーとの違いはナニ？普通その答えは「規模の大きさ」だ。ダヴィッドたちが改装を進めた農場の納屋は広大だから、キャバレーにはピッタリ。たとえ 1 階で牛を飼っているため牛の匂いがプンプンするとしても、広さだけはキープできているから、改装さえすればキャバレーへの模様替えは可能だ。しかし、その納屋が火事（？）で燃えてしまったら・・・？そんな、あっと驚く本作ラストに起きる大事件と、そこでもなお見せるダヴィッドの不屈の精神、逆転満塁ホームランの姿をしっかり確認したい。

2023（令和 5）年 12 月 25 日記